

今月の色

桜色

春づくし



深町 準之助

明けそめて菜の花

太陽にそまった連翹が

生きていていいねと雪柳に

ささやきかける

沈丁花の甘い匂いに郁季が

ほのかにほほえむ

ゆったり大輪の美女

面差しゆたかに人目をひく西洋椿

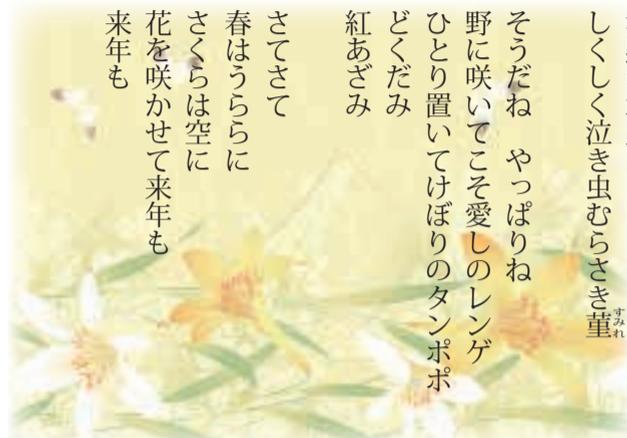
ひっそり冬越えの藪椿

夢の写し絵ほんのり宙に描く白木蓮

満天星の万灯が
あたりをなごませる
頬紅うすく何ゆえ恥じらう桃の花
さては愁いにぬれる梨の花
遠い日を思い出しては
垣にもたれる
沈黙の木瓜
しくしく泣き虫むらさき童

そうだね やっぱりね
野に咲いてこそ愛しのレンゲ
ひとり置いてけぼりのタンポポ
どくだみ
紅あざみ

さてさて
春はうららに
さくらは空に
花を咲かせて来年も
来年も



楽しい絵手紙



八女市稲富 大坪 榮子

私の絵手紙との出会いは、友人の家で作品展に出品された絵の暖かい優しさに感動した時でした。私も四季折々の花や野菜等を描いて、友人や孫に便りをしたら楽しい世界が開けるだろうと大坪先生の絵手紙教室に入会しました。何十年振りでしょうか、筆を握っても手は震え、構図、色の出し方等「あらあら」又平面的な絵になり迷うことばかりです。先生の魔法の筆で描き加えて頂くと私の歪んだ顔もにっこり。教室の皆様のお絵を見るのも楽しみです。下手の横好き「老いの楽しみ」に続けたいと思っています。

矢部川源流・杣の里の四季 ④

ラショウモンカズラ(羅生門葛)[シソ科]

矢部村では4~5月頃八つ滝付近の谷沿いの湿った場所で観察できる。茎が蔓(つる)性で地面を這って伸びるので葛(カズラ)という。



羅生門という和名の由来は、大きくふくらとした花の感じを、羅生門で渡辺綱(平安時代の武将)が切り落とした鬼女の腕に見立てたもの。

名前は恐ろしい感じがするが紫色の美しい花である。

(黒木町)松尾 重根

花を愛でる暮らしをご提案

筑後で創業27年、若菜に移転して5周年を迎えるフラワーウイング花かごでは、4月18日(土)・19日(日)に周年感謝フェア、花かごマルシェを開催します。ぜひお立ち寄りください。このクラッシーは300円のクーポンとしてご利用いただけますのでご来店の際にお持ちください(花かごマルシェ期間中はご利用できません)。1回につきお一人様1枚有効。平成27年4月30日まで。他のクーポンとの併用はできません。

フラワーウイング花かご
筑後市若菜1278-1(サザンクス通り)
TEL0942-53-8783



こんにちは。筑後警察署です。



新入学、新学期を前に、子どもに対する犯罪予防についてまとめました。

全国で子どもに対する連れ去り事案が相次いでおり、未然防止するためには、日ごろから子ども自身が犯罪被害防止に向けた心構えを身につけるとともに、保護者や地域の方で子どもの安全を守るために、気を配っていくことが重要です。

【子どもに教えておくべきこと】

- ① 見えにくい場所等危険な場所に近づかない。② 子ども110番の家などいざという時に逃げ込める場所を知っておく。③ 出かける

ときは、家族に行き先と帰る時間を告げるようにする。

【保護者や地域の方へのお願い】

- ① 子どもが集まる場所に目を配る。② 一人でいる子どもに目を配る。③ 普段から子どもに声をかける。④ 危険な場所にいる子どもに声をかける。

住民同士の強い絆で、地域から犯罪者を追い出し、子どもが安心して暮らせる地域づくりを目指しましょう。

子育て奮闘記Q&A



Q 父親は、子育てにどう関わったらいでしょうか。

A 一般的に父親は子どもと過ごす時間が短いようですが、一緒にお風呂に入るとか、絵本を読んだりあげるとか、できることから関わっていったらいいのではないのでしょうか。

また、子どもとの時間も大切ですが、父親には母親の情緒を安定させる

役割であってほしいものです。母親が子どもを叱っていると、「そんなに怒らなくてもいいじゃないか」と、母親が子どもからバカにされるような言い方は良くないと思います。「ママは疲れているから休んでおいで」などと言って、さりげなく子どもを引き受けてくれると、母親は落ち着くのではないのでしょうか。

「みんなの子育て奮闘記」より抜粋。この本のご購入お問い合わせは幸福保育園(筑後市)0942-1531-0175迄



眩き

迷える羊

行きつけの美容室でこのと、私の髪を乾かしながら会話の糸口をつかむように「私、今年、年女なんです」と話す、アシスタントの女の子。クルクルカールした髪と、ふくよかな体付きが何とも可愛らしく、「確かに羊だなぁ」と妙に納得してしまっていた。無邪気な丸い瞳が笑っている。

二〇一五年の今年、干支は「乙未」、羊の年である。身近な年男、年女を探してみたが見当たらない。ようやく思いついたので、存命なら今年で八十四歳になる私の父のことである。頑固一徹、やりた放題の父を、母と私は密かに「暴れ羊」と呼んでいた。性質は臆病で従順、いつも群れの中に生きている羊本来のイメージとは、余りにもかけ離れていたわが家のお父さん羊。それでも、芯は優しく憎めない暴れ羊だった。「迷える羊」という言葉を時々耳にするが、実は新約聖書マタイ伝の中の話で、深く重い意味を持つ。一〇〇匹の羊のうち一匹が迷えば、その飼主は九十九匹を残して、迷える一匹を探して歩く。神の愛にたとえた「迷える羊」の話が、この胸を強く揺さぶる。見かけ倒し、詐欺まがいの「羊頭狗肉」の現代。戦後七十年の今年、迷える一匹の羊はこの国なのかも知れない。明日は何方だ。私達は、大きな分岐点に立っている。

蓉子